

## 多形滲出性紅斑ニ就テ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/30701">http://hdl.handle.net/2297/30701</a>

## 多形滲出性紅斑ニ就テ

金澤醫學專門學校皮膚科教室(主任土肥博士)

高橋 幸 三

## 緒 論

本症ハヘブラ氏(Hebra)ノ命名セル疾患ニシテ又、多形紅斑(Erythema polymorphe Kaposi)ノ名アリ。抑モ紅斑 Erythem ナルモノハ皮膚病學上久シク動搖シ、且ツ論争サレタルモノナレドモ、ヘブラ氏出デテ此未知ナル紅斑族 Erythemgruppe ヨリ多形滲出性紅斑ノ名ノ下ニ特種ノ Gruppe ヲ統一シ、以テ明確ナル限界ヲ與ヘタルコトハ此種ノ系統上一大進歩ト言フヲ得ム。

本症ノ發生ニ就テハヘブラ氏及ビ其他ノ大家モ明カナル見解ヲ得ル能ハザリキ。ヘブラ氏ガ初メテ多形滲出性紅斑ノ固有ノ疾患ナルヲ唱ヘシヨリ、尋デレーウイン氏(Lewin)ガ血管神經性疾患トシテ其定義ヲ擴張シ、尙ホブフネル、ボロラツーツフ、ウンナ、ベニエー諸氏ニヨリ傳染性疾患ナルヲ唱道セラレ、殊ニヂューリング氏ハ最モ此說ヲ主張シ、結節性紅斑及ビ多形滲出性紅斑ハ共ニ全身傳染病ニシテ其發疹ハ症候的ノモノト主張セリ。然ルニ、ヘルレル氏ハヂューリング氏ガ此疾患ノ本態ヲ究メズシテ所論ノ明瞭ヲ缺キシヲ遺憾トシ、自家實驗例ニ就テ試驗セリ。即チ二〇%クレオリン液ニテ尿道ヲ刺戟セシニ、強度ノ化膿性尿道炎ヲ發シ、同時ニ關節炎ヲ起シ後、一週ヲ經テ、本症ヲ惹起セル例ヲ以テ自家中毒ト看倣シ、毒物ガ血漿中ニ存シ、血管運動神經中樞トノ關係ヲ説キ、レーウイン氏ノ說ニ贊同セリ。然レドモ、本症ハ又、蕁麻疹ノ如ク、其發生ガ血管神經性疾患ノミナラズ、血液ニ輸入セラルル有害ナル化學品及ビ不明ナル病原ノ直接作用ニ歸スベシ、トノ說ヲ稱フル者アリ。最後ニフィリップソン氏(Philippson)ハ病

理的檢索ニヨリ本症及ビ蕁麻疹ノ發生機轉ニ説明ヲ與へ、即チ皮膚ニ於ケル栓塞性轉移性機轉ニヨル血管壁ノ變化ニ歸セリ。

以上述べタル如ク、既ニ發生ニ就テ諸説アリテ目下尙ホ未決ノ内ニアルモ、本症ガ屢々關節若クハ筋肉ノ「ロイマチス様疼痛ト共ニ發スルコトハ最モ注目ヲ要スベキ點ニシテ、單ナル合併症ニ過ギズト言フ者アルモ、原因的ニ密接ナル關係アル如ク思惟セラル。

元來、本症ハ稀有ナル疾患ニアラズ、例之、東京醫科大學皮膚科ニ於ケル明治卅二年ヨリ卅九年ニ至ル外來患者ニシテ統計ニ供セラレタル總數二萬二千五百四十四人中本症八十三人ヲ有シ。又、九州醫科大學皮膚科ニテハ明治卅九年ヨリ大正四年ニ至ル外來患者三萬九百五十一名中七〇例ノ本症アリ。我、金澤病院皮膚科ニアリテハ大正二年ヨリ同九年十一月十九日迄一萬七千八百八十四人中五十六例ノ本症アリ。以上ノ如ク實驗例ハ決シテ少キニ非ラザルモ、本邦ニ於テ統計的ニ報告セラレタルモノナシ。而シテ余ハ、此度、恩師土肥教授ノ命ニ據リ、金澤病院皮膚科外來患者ニ就テ本症ノ統計的觀察ヲ試ミタルヲ以テ本誌ヲ以テ報告セムトス。

要スルニ本症ハ臨床上ニ於テハ症狀ノ多形ナルト、變化シ易キト、急激ナルコト等ノ特徴ヲ有シ、病理的ニハ皮膚ノ深部ニ達スル限局性浮腫ト充血ヲ有シ、且ツ白血球ノ浸潤ヲ伴フモノナリ。而シテヘブラ氏ハ本症ヲ其經過、發生病位及ビ時期等ニ關スル特徴ニヨリ左ノ分類ヲ試ミタリ。

本論ニ入ルニ先チテ紅斑ノ種類ヲ述ブレバ、ウオルフ氏ハ特發性紅斑 *idiopathische Erytheme* ヲ次ノ如ク分類セリ。

一、多形滲出性紅斑 *Erythema exsudativum multiforme Hebra.*

本症ハ尙ホ病原體發見セラレザル非接觸性、流行性傳染病ナリト。

二、結節性紅斑 *Erythema nodosum.*

多形滲出性紅斑ト類似セルモ彼ト同一ナラザル獨立疾患ナリ。

### 三、多形性症候的紅斑 polymorphe symptomatische Erytheme.

中毒ヨリ來ルモノニシテ之ヲ又、二別スルヲ得。

a、外部ヨリ毒物ノ侵入ニヨリ來ルモノ即チ exogene Intoxikation ノタメニ起ルモノニシテ例バ藥疹之ニ屬ス。

b、體內ニ發生セル有害物ニヨリテ起ル即チ Auto-Intoxikation ノ場合ニ來ルモノニシテ a ノ如ク血中循環ニヨリテ局處的皮膚ノ變化ヲ起ス。

### 四、血管神經性紅斑 angioneurotische Erytheme.

之ヲ二別シテ。

a、反射的ニ發生スルモノ。

b、血管運動神經中樞或ハ末梢神經ノ刺戟ニヨリテ起ルモノ。

以上ノ内一、二、三ハ恐ラク轉移性栓塞性機轉ニヨリテ發スルモノナルベク四ノ b ノ血管神經中樞ノ刺戟狀態ハ傳染性物質ニヨリテモ起ルナラムト氏ハ述ベタリ。

上述ノ分類法ハ當ヲ得タルヤ否ヤハ暫ク措キ、本症ノ位置ヲ推知スルニ足ラム。

症狀。本症ノ發疹ハ劇シキ炎症ヲ伴フ急性ノ症狀ヲ呈シ、且ツ急性ニ經過スル疾患ナリ。而シテ特有ノ性質ヲ有

スル發疹ト、多クハ一般全身症狀トヲ以テ發ス。其發生ニ際シテ前驅症ヲ有セズシテ或ハ、「アンギーナ」ヲ以テ初マルコトアリ。患者ハ倦怠違和ヲ感ジ、熱灼輕度ノ疼痛、癢痒ト共ニ指甲、前膊、足背、下腿稀ニ顔面ニ發疹ヲ見ル、發疹ハ帽針頭大乃至豌豆大ノ圓形鮮紅色ノ紅斑ニシテ、皮膚面上ニ隆起スル硬キ小結節ヲ作り、數時、或ハ數日ノ間ニ増大シテ、銀貨大ノ圓斑トナリ、邊緣ハ鮮紅色ヲ呈スルモ中央ハ陷沒シテ紫紅色ヲ呈スベシ。之レ本症ノ特徴ナリ、斯ク中心ニ於テ退行シ邊緣ニ向テ進行シ紅斑手掌大ニ及ブコトアリ。爲ニ圓斑變ジテ環狀ヲ呈スルトキハ之ヲ環狀紅

斑 Erythema annularis ト云ヒ、又、數個ノ環狀紅斑相連絡スルトキハ迂曲セル如キ外觀ヲ帶ブルニ至ル。之ヲ迂廻狀  
又ハ蛇行狀紅斑 Erythema gyratum s. serpiginosum ト稱ス。又中心、消褪セル圓斑ノ中央ニ新丘疹ノ發生ヲ見ルト  
キハ虹彩狀ヲ呈シ虹彩狀紅斑 Erythema iris トイフ。又、炎症ノ度、強ク充血ト滲出液ノ漏出ヲ來セバ小水疱性紅斑  
Erythema vesiculosum ナリ。又、之ノ小水疱融合シテ大水疱ヲ形成セバ大水疱性紅斑 Erythema bullosum ニシテ、  
此水疱内容ハ時ヲ經過セバ溷濁スルモ、新鮮ナルモノハ透明ナル漿液ニシテ充實、緊張セリ。又、稀ニ皮疹中ニ出血  
ヲ見ルコトアリ。斯ク本症ハ急性ニ經過スルモ時ニ發生徐々ニシテ舊疹ノ消失セル後ニ、數個ノ新疹ヲ發シ、經過緩  
慢ナルコトアリ。上述セル如ク發疹ハ多形ニシテ紅斑ノ大小、丘疹、水疱等種々ナルノミナラズ、各發疹ノ配列モ亦  
變化ニ富ミ、從ツテ其外觀ハ極メテ様々ナリ、之、亦本症ノ多形 multiforme ノ名アル所以ナリ。

**部位。** 發生部位ハ多ク一定シ、對側ニ發生スルコト、四肢伸側ヲ犯スコト、殊ニ手甲、前膊伸側、足背、下腿伸  
側面ニ來ルコト等ハ本症ノ特徴ニシテ顔面モ亦、屢々發生ス。稀ニ手掌、足蹠ニ來ルコトアリ。顔面ニ生ズルトキ  
ハ、口腔粘膜、口唇、硬口蓋、咽頭、扁桃腺等ニ發生シ、水疱被膜ハ破レテ紅暈ヲ有スル糜爛面ヲ呈スルコトアリ。  
殊ニ是等ハ再發型ニ多シト言フ。ツームプッシュ氏 Numbusch ハ有髮頭部、軀幹、上膊、上腿ノ屈側ハ殆ド犯サズト記  
載スルモ必シモ然ラズ、余ノ例ニアリテハ殆ド全身ニ生ジタルモノアリ。又粘膜ハ口腔ノミナラズ結膜ヲモ犯スコト  
アリ。此時ハ特異ニシテ眼球結膜ノ眼裂ヨリ露出スル部位ニ發シ、流淚、熱灼アリ、他ノ結膜炎ニ比シ甚ダ特異ナリ  
ト、又陰部粘膜ヲ稀ニ犯スト云フ。

**全身症狀。** 前驅症トシテ頭痛倦怠、食思不振、結膜炎、咽頭炎等ヲ來スコトアリ。又何等伴ハズシテ來ルコトア  
リ。余ノ症例ニテハ伴ハザルモノ半數ヲ占メタリ。前驅期及ビ發疹期ハ發熱スルコト多クシテ、熱型不定ナルモ弛張  
スルコトアリ。チューリッング氏ハ百五名ノ患者中其二〇%ニ熱候ヲ見タリト、余ノ例ニテハ五十六例中四例即チ七一  
%ナリ、次デ多キ合併症ハ「ロイマチス様疼痛ニシテ關節、筋肉ノ索引痛ヨリ急性、殊ニ、疼痛性關節炎ヲ來スコトア

リ。之ヲ要スルニ本症ハ「ロイマチススムス」トハ極メテ親密ナル關係ヲ有スルモノナリトハ、一般ニ是認スル所ナリ。稀ニハ本症ガ「ロイマチス性關節炎ニ於ケル如ク、漿液膜炎、心内膜炎、虹彩炎等ヲ發スルコトアリ。余ノ統計ニテハ「ロイマチス様疼痛ヲ發スルモノ二六%、筋痛ヲ發セルモノ七一%ヲ證明セリ。其外、頸腺腫脹、肝臟腫、脾腫、蛋白尿等ヲ發スルコトアリ。土肥慶藏博士ハ重症ナル漿液膜病ヲ發スルハ本症ニ非ラズシテ、他ノ原因ニヨル滲出性中毒疹ナラムト言ヘリ。

**病理。** 余ハ患者ヨリ標本ヲ採取セザリシヲ以テ解剖的所見ニ關シテハ唯、諸家ノ實驗セル所ヲ述ブルノミ。組織的ニハ一般炎症ノ状態ヲ呈ス。即チ乳頭體部ノ血管ハ擴張シ此擴張セル血管周圍ニハ圓形細胞浸潤ヲ認メ、且ツ乳頭ハ水腫狀ニ腫脹シ結締織モ亦、膨大シ透明トナリ、表皮モ浮腫ノタメ有棘細胞膨大セリ。然レドモ、全ク特別ナル組織的變化ヲ呈セザルモノトス。

**經過。** 上述セル如ク急性ニシテ發生後一二週間ハ舊疹ノ増大ト同時ニ一方ニハ、新疹ノ發生ヲ見、次デ次第ニ吸收セラレ、小水疱ハ痂皮ヲ結ビ、丘疹ハ鮮紅色ヨリ褐色ニ變ジ、終ニ落屑ヲ以テ消退スベシ。然レドモ時ニ發疹、長ク存在シ、長時日、吸收セラレザルコトアリ。之ヲ持久性紅斑 *Erythema persistans* トイフ。本症ハ大多數ニ於テ、再發シ易キモノニシテ、一週或ハ一ヶ月後ニ新疹再發シ、種々ノ間歇時ヲ以テ反覆スルコトアリ。余ノ統計ニテハ二一%ニ於テ再發ヲ證明セリ。ツームブッシュ氏ハ再發型ハ顔面、殊ニ口腔粘膜炎ヲ犯スコト多シト述ブルモ果シテ然ルカ、余ノ例ニテハ二例ニ於テ氏ノ主張ニ適合セリ。

**診斷。** 稀ニ困難ナルコトアルモ第一ニ注意スベキハ發疹ニシテ種々ナル外觀ヲ呈スルモ常ニ急性炎症ノ特性アリ。即チ中心紫紅色邊縁鮮紅色ノ紅斑ニシテ丘疹、水疱ノ併發アリ。水疱ハ新鮮ナレバ緊滿、圓形ニシテ内容ハ透明、時ニ出血性ナルコトアリ。第二ハ部位ニシテ相對性ニ發シ、手甲、足背、前膊及ビ下腿ノ伸側、稀ニ顔面ニ來ル、第三ハ急性ノ經過ト全身症狀、第四ハ季節ニ關シテ發シ、青年ニ多キコト等ニ注意スベシ。

鑑別診斷。鑑別スベキハ一、紅斑性濕疹ニシテ、コハ散漫性ニ來リ、癢痒甚ダシク好シテ屈側ニ來タリ、全身症  
 狀ナシ。二、天疱瘡ノ水疱ハ大ニシテ弛緩シ、發生部位ハ一定セズ、炎症ヲ缺クカ、或ハ有スルモ周圍ノ紅暈著シカ  
 ラズ、且ツ經過極メテ慢性ナリ。三、中毒疹ハ部位異リ多ク顔面軀幹ニ來ル。四、微毒疹ハ經過緩慢ニシテ好ムデ顔  
 面軀幹ニ來リ、四肢ニ於テハ屈側ニ來リ易ク、浸潤著明ニシテ銅赤色ヲ呈シ。五、蕁麻疹ハ部位一定セズ、出沒忽然、  
 癢痒劇烈ナリ。六、結節性紅斑ハ多ク下腿ノ前面ニ好發シ、紅斑ハ半球形ニ隆起セル皮膚面上ニ存シ、疼痛アリ、殊  
 ニ壓迫ニヨリテ甚ダシ。

原因。本病ノ原因ニ就テハ緒論ニ述ベタルガ如ク初メヨリ論争サレタルモノニシテ今、尙ホ、不明ニ屬ス、分  
 類ノ條下ニテ述ベタル如ク、ウオルフ氏ハ病原體不明ナル非接觸性傳染病ナリトシ、デューリング氏又、傳染性説ヲ主  
 張シ、ヨセフ氏 Joseph H. 二ノ傳染病、例ハ腸チフス「經過後本症ヲ發セル例ヲ實驗シ且ツ毒素「プトマイン」混合傳  
 染ニ因ルモノトハ解シ得ベカラズト言ヘリ。カボジ氏ハ或絲狀菌ヲ發見シ、バウムレル氏 Baumler ノ見解ニテハ血  
 中ノ細菌ガ皮膚毛細管領域ニ沈着シ、恰モ壞疽性心内膜炎ノ如キ病變ヲ起スナラムト。又、本症患者ノ「インヂカン」、  
 「インドル」、「スカトール」等排泄量ノ増加セルヲ檢定シ腸内發酵作用モ關係スルナラムト説ク者アリ。又、一八七  
 一年リッブ氏ハ本症十九例ニ「ロイマチス」症狀ヲ證明シ二三ノ微毒例ヲ見タリ。然レドモ、注目スベキハ本症ガ「ロイ  
 マチス」様疼痛ヲ合併シテ來ルコトニシテ殊ニ春秋ニ好發シ、青年ヲ犯シ、屢々進入門戸ト見ルベキ「アンギーナ」ヲ以  
 テ初發スルコトハ本症ガ關節ロイマチス」ト密接關係アルニ非ラザルカト、ヨセフ氏ハ説ケリ。然レドモ土肥慶藏博  
 士ハ本症ニ於ケル關節痛ハ他ノ急性傳染病ニ於ケル如ク、一ツノ合併症ニ過ギズシテ恐ラク、瘴氣性傳染病ナラムト  
 反對セリ。又、レーウイン氏ハ尿道ヲ「サビナ」軟膏ニテ刺戟シテ本症ノ發セル四例ヲ、チュメテール氏ハ硝酸銀ニテ尿  
 道ヲ刺戟セルニ本症ヲ發セシ一例ヲ報告シ、ヘルレル氏ハ又、緒論ニ述ベタル如ク同様ナル一例ヲ實驗シ、以テ偶然  
 ナラザルベキヲ證明シテ既ニ前述ノ如ク自家中毒ト看做セリ。且ツ血漿中ニ於ケル毒物ト血管運動神經中樞トノ關係

ヲ論ジテ、レ—ウイン氏ノ血管神經性説ニ賛シテ曰ク、脊髓、延髓及ビ腦ニ於ケル血管運動神經中樞ハ各臓器ト皮膚ニ存スル局所中樞ノ湊合スル所ニシテ是等、中樞ノ侵サルル區域ノ大小、廣狹、時間ノ緩急ニ從ヒテ、疾病ノ經過ニ強弱ノ差ヲ生ズベシトセリ。本症ノ好發部位、對側發生、紅斑ノ限局シテ瀰蔓セザル事實ハ容易ニ説明スルコトヲ得ベシ。蓋シ紅斑ノ大サハ罹患セル局部中樞ニ屬スル血管領域ニ限り、又、發疹ハ毒物ノ是等、中樞ニ斷エズ働ク間ハ存在スルモノナリ。故ニ刺戟止メバ又、皮疹ハ消散スベシ、之レ本症ヲ以テ一ツノ血管神經症トナス所以ナリト述ベタリ。又、中野博士ノ實驗セラレタル一例ハ濕地ニ於テ從業セル船大工ニ本症ヲ發シ、他ノ從業員ニモ同様ノ發疹ヲ見タリト、又、櫻根博士ノ一例ハ濕氣ヲウケ或ハ長ク起立セル後ニ發生セルモノニシテ同時ニ紫斑病ヲ合併シタルモノナリ。共ニ濕氣ト關係アル如ク思惟セラル。余ノ五十六例中水作業ニ從事セル後ニ發セル二例アリ。

以上ノ如ク本症ノ原因ハ細菌説、寄生性説、反射説、自家中毒説、血管運動神經説、瘴氣性傳染病説、等種々アレドモ要スルニ一原因ノミヲ以テ解スル能ハズ、其發生ニハ數多ノ條件ト個人體質等ノ關係スルニ非ラザルナキカ。豫後。可良ニシテ殆ド二三週ニシテ治ス、重症ナル心内膜炎、心外膜炎ニテ生命ノ危險ヲ來スハ稀ニシテ斯カルモノハ本症ニ非ラズシテ敗血症ナラムト。

療法。局處療法ハ對症的ニシテ疼痛等ナケレバ必要ナキコトアリ 或ハ二〇%「カルボールチンクリニメント」、一〇%「チオノールアルコホル」ノ塗布ヲ行フ。水疱ニハ亞鉛華油ヲ用ユベシ。

炎症甚ダシク、疼痛癢痒等アレバ安靜ヲ命ジ外用藥ヲ塗布セル上ニプロ—氏液、鉛糖水等ノ冷罨法、發疹 古ケレバ溫罨法ヲ施シ、水疱破ルレバ「チンクポ—ルザルベ」ヘブラ氏軟膏或單ニ硼酸軟膏ヲ布ニ延バシテ貼用ス。口部粘膜炎ノ侵サレタルトキハ二%過酸化水素水、二%鹽素酸加里水、〇・〇一%過滿俺酸加里液ニテ含嗽スベシ。内服トシテハ「ザリチール酸劑効アリ、殊ニ合併セル「ロイマチス様疼痛」ニモ効アル故ニ斯ル疼痛ナキ場合ニモ賞用セラル、即チ「ザリチール酸ナトリウム」、「ザロール」、「ザロフェン」其他「アスピリン」、「アンチピリン」、「フェナセチン」、「アンチフェ

プリン」、「ピラミドン」、「ヒニン」等用ヒラル。入浴、洗滌等ハ禁ジ、經過ノ緩慢ナル者又ハ反覆セル再發型ニハ砒素劑ト鐵劑トヲ共用スルモ可ナリ。一方、便秘ヲ願慮スル必要アリトス。

余ハ大正二年ヨリ大正九年十一月廿日迄ノ金澤病院皮膚科新來患者一萬七千八百八十四名ニ就テ調査シ本症例五十六名ヲ得タリ依テ左ニ其病歴ヲ摘録スベシ。

### 症 例

第一例。太田某男。四十五歳。農夫。大正二年八月廿日初診。

診 斷 多形滲出性紅斑。

既 往 遺傳等ニ特記スベキコトナシ。

本月十四日突然手背前膊ノ伸側ニ赤色丘疹ト大小不同ノ斑ヲ生ジ掻痒及疼痛アリ一昨年冬頃ヨリ關節「ロイマチス」アリ、目下便秘ニ傾ケリ。

第二例。岡本某女。二十歳。農婦。大正二年十月十八日初診。

診 斷 多形滲出性紅斑。

二三年前ヨリ何等誘因ヲ認メズシテ四肢殊ニ手足部ニ冷感ヲ來シ淡紫色ニ浮腫ヲ起シ脈痛アリ處々ニ結節狀物ヲ觸ル。

第三例。矢本某男。二十五歳。農夫。大正二年七月二日初診。

診 斷 多形滲出性紅斑兼「アクロメガリ」。(本症ハ土肥教授皮膚科雜誌第十三卷第十號ニ報告セラレタリ)

遺傳的關係 父ハ死亡シ、母及二人ノ同胞ハ健存、幼年時ヨリ健ナラズ、十二歳ノ時握力減退シ今日ニ至ル、水作業ニ從事セル事多シ、淋疾ハ廿歳ノ時經過セリ、且ッ小兒時ヨリ各指ノ第一關節ニ於テ骨ノ肥大アリ疼痛ハ欠ク。

現病歴 本症ハ廿二歳ノ頃發病シ、初メ赤色ノ發疹四肢ノ伸側ニ發シ當時豌豆大ナルモ次第ニ増大シテ一錢銅貨大トナリ中央ニ色素沈着ヲ殘

原 著 高橋ニ多形滲出性紅斑ニ就テ

シ、注意スルモ漸次周圍ニ増大シ約一ヶ月位ニテ消退スルモ又新生シテ發病以來今日ニ至ルマテ全發疹ノ消失セルコトナク、新舊數十個ノ發疹必ズ存在スト云フ、但シ毎年春三四月頃及秋トニハ發疹最も多數ニ發シ暑夏ト嚴寒ニ少シト云フ、各發疹ハ自覺的症狀モナク時々諸處ノ關節殊ニ腰關節ニ「ロイマチス」様疼痛ヲ覺エ殊ニ起立ニ際シテ甚シ又少シク腫脹スルコトアリ。

現 症 体格營養共ニ中等内臟器ニ異常ナシ、尿中蛋白、糖分ヲ証明セズ、發疹ハ豌豆大ヨリ小指頭大ニ達シ小ナル發疹ハ深紅色ニシテ皮膚表面ヨリ隆起シ結節狀ヲ呈シ稍大ナル發疹ハ中央ハ暗紫色ニシテ少シク扁平トナリ周圍ハ隆起シテ深紅色ヲ呈ス、尙ホ更ニ増大セル發疹ニアリテ中央ハ全ク治シ暗褐色ノ色素沈着ヲ殘シ周縁ハ鮮紅色ニシテ堤狀ニ隆起シ又環狀半環狀ヲ呈ス、發生部位ハ主トシテ顔面上肢伸側手背、手掌、頸部、胸部上背部等ニ多數ニ存シ下肢ノ伸側足背足趾ニハ散在性ニ存シテ何レモ左右相對性ニ發セルヲ認ム、發疹部ハ知覺異常ナク又破潰癢痕等ヲ形成セズ膝關節ハ腫脹シ歩行起立ニ際シテ疼痛アリ指ノ第一及第二關節ノ骨端ハ著シク肥厚シ強ク壓スルハ鈍痛ヲ覺ユルモ運動ニ對シテハ何等障礙ナシ。

第四例。山森某女。四十二歳。農婦。大正三年三月十一日初診。

原著 高橋 多形滲出性紅斑ニ就テ

診斷 多形滲出性紅斑。

約一週間前ヨリ四肢、胸部、顔面等ニ痒痒及疼痛等ナキ皮疹ヲ生シ漸次増大ノ傾向アリ、兩肘關節ニ疼痛ヲ覺ユ。

既往 五六年前ニ有痛性結節性腫脹ヲ下腿前面ニ發セシコトアリ。

第五例。安田某女。五歳。呉服店娘。大正三年四月廿四日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

十日程前顔面ニ痒痒アル皮疹ヲ生シ醫治ニヨリ治セルモ再ビ四五日前ヨリ同様ノ發疹ヲ兩前膊及兩下肢ニ生シ痒痒甚シ。

第六例。龜水某女。三十五歳。農婦。大正三年四月廿三日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

十日程前ヨリ右側頰部ニ潮紅腫脹ヲ來シ痒痒アル皮疹ヲ生シ漸次増大セリ。

第七例。坂本某男。廿三歳。學生。大正三年七月廿九日初診。

診斷 多形滲出性紅斑、慢性毛囊炎。

二三日前ヨリ右指伸側ニ粟粒大、潮紅ノ小皮疹ヲ生シ次テ右趾ニモ蔓延セリ其他腰部ニ一ヶ年以前ヨリ痒痒アル皮疹ヲ生シ糜爛セリ。

第八例。庭田某男。廿五歳。農夫。大正三年五月十四日初診。

診斷 多形滲出性紅斑、圓形禿髮症。

毎年二月及九月ニ至レバ發赤セル小皮疹ヲ兩手甲ニ生シ温ニヨリ痒痒ヲ感ズト云フ。

第九例。西藤某男。卅六歳。農夫。大正三年六月六日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

本年三月中旬飲酒セルニ兩側ニ疼痛ヲ感シ急ニ顔面、胸部、手甲等ニ赤紫色ノ發疹ヲ生シ爾來五六回出沒セルガ出現スルヤ稍局所ノ緊張感及輕度ノ疼痛アリ本症ノ發病十日程前風邪ノタメ病床ニ入り醫治ヲ受ケタリ、

現今兩大腿ノ深部腰部ニ刺痛性ノ疼痛アリ、目下三十八度七分ノ發熱アリ。

第十例。西川某女。廿二歳。無職。大正三年六月廿二日初診。

診斷 多形滲出性紅斑、頭部乳嘴腫。

本症ノ記載全クナシ。

第十一例。辻某男。廿歳。鐵道員。大正四年二月廿五日初診。

診斷 多形滲出性紅斑、淋毒性前部尿道炎。

一ヶ月以前ヨリ兩手甲、兩下腿ニ粟粒大ヨリ帽針頭大ノ發疹ヲ生シ紅色ヲ呈ス痒痒アリテ殊ニ夜間ニ甚シ。

第十二例。寺井某男。十九歳。小間物商。大正四年六月廿四日初診。

診斷 多形滲出性紅斑、赤癬、急性顔面濕疹、惡性黴毒。

本症ニ就テ記載ナシ。

第十三例。福田某女。廿二歳。農婦。大正四年三月卅一日。

十五六歳ノ頃ヨリ秋ヨリ初冬ニカケ前膊及下腿ノ伸側面、手甲足背ニ褐紫色ヲ呈スル皮膚面ヨリ隆起セル發疹ヲ生ズト多少壓痛アリ。

第十四例。細川某女。三十歳。呉服商妻。大正四年七月卅日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

本年三月頃ヨリ手掌ニ小ナル散在性ニ發セル赤色丘疹ヲ生シタリシガ三月末再同様ノ發疹ヲ顔面ニ生シ之ガ漸次増悪シ四五日前ヨリ腫脹シ痲皮ヲ造ルニ至ル地方醫ハ腎臟ニ疾患アリト言ヘリト云フ、目下妊娠中ニシテ既往ニ黴毒ヲ知ラズト云フ。

第十五例。小西某男。五十六歳。藥種商。大正四年十一月十三日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

十一月初旬ニ紫紅色多少痒痒性ノ隆起セル皮疹ヲ顔面、頭部、四肢、軀幹等ニ發セリ。

第十六例。齋藤某男。廿五歲。吳服商。大正四年五月六日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

一週間前ニ赤色皮疹ヲ膝關節伸側面ニ生シ漸次兩手甲足背ニ及ビ、輕度ノ瘙痒ヲ感ズ。

第十七例。西明某女。十三歲。學女。大正四年五月十二日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

三日前ヨリ褐色ノ多少隆起セル斑ヲ下腿ノ伸側ニ生シ輕度ノ壓痛アリ。

第十八例。谷某男。五歲。農。大正五年六月十九日初診。

十日程前ヨリ戰慄ヲ以テ發熱シ同時ニ小ナル發疹ヲ生セリ漸次増大シ中央ニ水泡ヲ生シ化膿スルニ至ル。

第十九例。米澤某男。廿六歲。農夫。大正五年七月初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

一ヶ月前突然ニ頭部ニ二個、右前腰ニ一個ノ小疹ヲ生シ二三日ニシテ赤色消失シ前膊ノモノハ僅ニ其痕跡ヲ止ムルノミ、合併症トシテ點狀出血アリ。

第二十例。牧野某女。廿四歲。肥料商妻。大正五年五月六日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

三日前行ニ或賣藥ヲ塗布セルニ其時異常ナカリシモ其翌日左右ノ前膊ニ瘙痒性發疹ヲ生シ輪狀ニ擴大スル傾向アリ今朝ニ至リ足部ニモ同様ノ發疹ヲ生セリ。

第二十一例。早川某男。廿九歲。味噌商。大正六年七月十日初診。

十日程前ヨリ兩手掌温ニヨリ瘙痒ヲ感シ固ク握レバ疼痛ヲ覺ユト之ト同時ニ右下肢、足背等ニ瘙痒アル皮疹ヲ生シ兩足趾ニモ瘙痒アリトイフ。

第二十二例。鷺田某男。十歲。藥劑師。大正六年五月廿五日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

四五日前ヨリ左手背ニ五厘銅貨大、頸部ニハ小豆大乃至大豆大ノ發疹ヲ生シ赤色浮腫着シク自覺症ナシ、二三年前ヨリ左眼瞼下部ニ五厘銅貨大ノモノ常ニ飲酒後ニ生ズト云フ。

第二十三例。平野某女。十一歲。學女。醬油商娘。

診斷 多形滲出性紅斑。

二週間前ヨリ兩上膊ニ瘙痒アル赤色皮疹ヲ生セリ。

第二十四例。和泉某男。廿四歲。材木商手代。大正六年二月六日初診。

診斷 多形滲出性紅斑、第二期徵毒。

昨年六月末原因不明ニシテ左鼠蹊腺腫脹シ八月頃咽頭異常感、頭髮少シク脱落シ顔面ニハ小發疹ヲ生セリ昨年末ヨリ咽頭疼痛異常治セズ二月三日某醫ニヨリ頸部瘻法ヲナセルニ三日夕方ヨリ翌朝ニ至リ俄ニ顔面、頸部、頭部ニ赤色丘疹ヲ生シ水泡粟粒大ヨリ大豆大或融合シテ大ナル水泡ヲ造ル自覺症更ニ有セズ。

第二十五例。大野某男。六十三歲。漁夫。大正六年五月十四日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

數日前全身屈側面ニ瘙痒アル赤色ノ皮疹ヲ生シ一ヶ月前ヨリ同様ノ發疹出沒ス。

第二十六例。田上某女。十一歲。學女。大正六年三月二日初診。

診斷 多形滲出性紅斑、凍瘡。

一週間以前ヨリ手足、頰部ニ瘙痒アリ搔破ニヨリ皮膚ニ小丘疹ヲ生シ同時ニ發赤シ來リ次テ疼痛ヲ感ズ。

第二十七例。宮崎某男。四十二歲。農夫。

診斷 多形滲出性紅斑、第二期徵毒。

十八歳ノ時花柳病ヲ感染シ「アボ」ヲ生シテ切開シ廿一歳ノ時又感染シ此時「アボ」ノ切開ハセズニ治セリ、又昨年不潔ノ交接ニヨリ陰莖ニ

一個ノ皮疹ヲ生ジ同時ニ鼠蹊腺腫脹ヲ來シ水銀劑擦入ト内服藥ヲ用ヒ一同ノ注射ヲモ受ケズ輕快セルモ一ヶ月以前ヨリ頸腺腫脹ヲ來セリ、背部、胸部ニ赤斑ヲ生ジ自覺症ナシ時ニ關節痛アリ數日前ヨリ咽頭ニ嚙下時疼痛アリ背部ノ發疹ハ増大シ來ル。

第二十八例。 林某女。四十歳。農婦。大正七年九月九日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

二週間前ヨリ手甲ニ中心腿色シ周圍ハ紫紅色ノ發疹ヲ生ジ自覺症ナシ。

第二十九例。 高木某男。三十四歳。吳服商。大正七年七月六日。

診斷 多形滲出性紅斑。

一昨日ヨリ突然四肢背部、腹部ニ帽針頭大ヨリ大豆大ノ多少隆起セル赤色丘疹ヲ發シ中央ハ褪色セリ痒痒疼痛ハナキモ手甲、足蹠ニハ知覺異常アリ。

第三十例。 矢木某女。十五歳。學女。大正七年六月十二日初診。

診斷 多形滲出性紅斑、先天微毒。

五月二十日頃ヨリ四肢ニ赤色腫脹セル大小不同ノ發疹ヲ生ゼリ、二三年前ヨリ時々再發セリ。

第三十一例。 赤壁某男。六十七歳。醬油商。大正七年五月十四日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

昨年六月本症ヲ發シ同年八月消失セリ而ルニ本年四月中旬再發シ上肢下肢最強ク陰囊陰莖背面、頸部稀ニ腹部ニ紅色斑ヲ或ハ一般ニ赤色ヲ呈シタル上ニ紅色丘疹或ハ水泡アリ或ハ只紅斑ナルアリ其發疹消退セル後ニ褐色斑ヲ殘セリ、糖尿病ヲ經過セリ。

第三十二例。 上田某女。三十歳。無職。大正七年十二月十二日。

診斷 多形滲出性紅斑。

昨年末頃ヨリ兩手足ガ凍瘡？ニ犯サレシニ三日程前ヨリ兩手、兩肘關節

伸側兩足背足蹠ニ痒痒アル赤色丘疹ヲ群生セリ。

第三十三例。 大窪某男。十一歳。學生。大正七年三月廿九日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

兩膝部下腿下部兩手背胸部等ニ粟粒大乃至豌豆大暗赤色ノ丘疹ヲ生ジ數日ニシテ消褪スルモ再發シ易ク惡寒倦怠アリ。

第三十四例。 小木某男。十歳。學生。大正七年十二月十四日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

一週間前ヨリ突然兩手背ニ疼痛アル深紅色ノ發疹ヲ相對性ニ發シ丘疹ノ中心ハ多少凹陷セリ。

第三十五例。 佐藤某女。二十二歳。農婦。大正七年十二月廿三日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

三日前ヨリ兩手甲兩足背ニ皮膚面ヨリ多少隆起セシ米粒大、大豆大ノ丘疹群生シ時ニ赤色ヲ呈スルモ寒冷ニ遇ヘバ消失ス、年ニ三四回同様ノ發疹ヲ生ズ。

第三十六例。 荒井某男。十八歳。學生。大正八年一月四日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

本年一月一日ニ兩手甲兩足背ニ淡紅色隆起セル大小多形ノ發疹ヲ生ジ漸次其周圍ニ擴大セリ指關節ノ疼痛及運動障礙アリ。

第三十七例。 朝日某男。十七歳。學生。大正八年三月十八日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

十五日前ヨリ左側手指關節、左側趾關節ニ腫脹及疼痛アリ。

第三十八例。 牛田某男。三十二歳。官吏。大正八年六月十八日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

十二日前ヨリ右前脛ニ隆起セル大小不定ノ紅腫ヲ有スル丘疹ヲ生ジ浮腫狀ヲ呈ス、兩足ニモ同様ノ發疹ヲ十日前ヨリ發シ昨年モ斯ル發疹ヲ見タ

ルコトアリ其跡ニ色素沈着ヲ殘セリ、目下左側腕關節ニ疼痛アリ十二日  
前ヨリ口腔粘膜ニ糜爛ヲ起シ一週間前ヨリ舌ノ下面ニ白色ノ發疹ヲ生シ  
疼痛アリ。

第三十九例。 上野某女。十九歳。酒造業。大正八年五月十五月初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

十日前ヨリ軀幹四肢ニ淡紅色ノ環狀疹ヲ生シ自覺症ヲ有セズ。

第四十例。 岡田某女。十八歳。無職。大正八年八月十二月初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

幼少時ヨリ關節「ロイマチス」ニ罹リ時々醫治ヲ受ケツ、アリシガ一  
昨日ヨリ下腿ニ淡紫色ノ疹ヲ生ズルニ至ル自覺症ナシ。

第四十一例。 炭元某男。卅四歳。材木商。大正八年八月卅日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

現症 一月廿日頃發病發熱甚シ、七月末惡寒發熱四十度ト共ニ全  
身ニ發疹シ翌日解熱發疹、十日程ニテ消退セリ發疹全身ニ生ズルハ一般  
ニ浮腫狀トナリ握手スル能ハズ咀嚼時ニハ關節痛アリ發疹融合シテ地圖  
狀ヲ呈ス全身倦怠、頭痛アリ睡眠ハ障礙セラレ食思平常發疹ハ十日間程  
ニテ消退セリ。

現病歴 一月廿日頃發病同月廿五日輕快セシガ卅日ニ再發シ三、四  
月中ハ平常ノ通りナリシモ五月中旬頃ヨリ再發シ五六日間持續セシモ其  
ヨリ七月中旬マテ異常ナカリキ。

第四十二例。 竹村某男。十七歳。無職。大正八年六月三日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

一ヶ月半前ヨリ下肢ニ赤色ノ皮膚面ヨリ隆起セル發疹ヲ生シ後上肢背部  
等ヘモ同様ノ發疹ヲ生シタリ痒痒ナ有ス。

第四十三例。 宮野某。四十五歳。無職。大正八年十二月六日初診。

原著 高橋ニ多形滲出性紅斑ニ就テ

診斷 多形滲出性紅斑。

一週間前ヨリ後頭部ニ拇指頭大ノ赤色疹ヲ發シ自覺症ナキモ壓ニヨリ輕  
度ノ疼痛アリ現時全身ノ處々ニ米粒大丘疹孤立性ニ發生スルニ至ル惡寒  
熱發三十七度八分、頭痛等アリ。

第四十四例。 村田某女。五十六歳。農婦。大正八年十月十三日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

本月六日頃ヨリ兩前臑兩下腿顔面ニ暗紫紅色ノ丘疹ヲ生シ疼痛アリ。

第四十五例。 森田某男。三十七歳。瓦職。大正八年八月廿日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

十日前四肢肩胛部、頭部ニ赤色ノ發疹ヲ發シ自覺症ナシ、頭痛アリ。

第四十六例。 萩野某女。十八歳。女中。大正九年三月六日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

四十五日頃ヨリ手及足部ニ發疹ヲ生ゼリ。

第四十七例。 山崎某女。十八歳。裁縫師。大正九年三月十九日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

本年一月上旬ヨリ四肢ニ赤色輪狀ノ腫脹ヲ來シ熱灼疼痛感アリ、同時ニ  
「ロイマチス」様疼痛アリ。

第四十八例。 今井某男。二十二歳。菓子商手代。大正九年一月二十日初  
診。

診斷 多形滲出性紅斑。

五月程以前手甲、前臑、上及下腿ニ赤色痒痒性發疹ヲ生シ増大ノ傾アリ。

第四十九例。 石井某女。四十四歳。農婦。大正九年八月二日初診。

診斷 多形滲出性紅斑。

四十五年前ヨリ夏期ニ自覺症狀ナキ發疹ヲ兩手甲ニ生シ耳鳴及左膝關節  
ニ「ロイマチス」様疼痛アリ。

第五十例。 出村某女。二十歳。農婦。大正九年五月十日初診。

診 斷 多形滲出性紅斑、「ヒステリー」、ロイマチス「性紫斑。

五六年前ヨリ八、九月ヲ除ケル季節ニ寒冷ノ空氣ニ遇ヘバ四肢ノ皮膚ニ有痛性發疹ヲ生シ温ニヨリテ自然ニ消退ス「ロイマチス」様疼痛アリ。

第五十一例。 岡村某男。五十歳。公園使丁。大正九年二月廿四日初診。

診 斷 多形滲出性紅斑兼胃痛。

一昨夜突然背部、腹部、手甲、足背ニ大豆大ノ圓形深紅色ノ發疹ヲ生シ尖端ニ膿點アリ。

第五十二例。 小野田某女。十七歳。肥料商。大正九年九月三日初診。

診 斷 多形滲出性紅斑。

七月頃ヨリ右側手甲、左脚ニ紫紅色ノ丘疹ヲ生シタリシガ七月末ニ至リ消失シ再ビ八月初旬ヨリ發スルニ至ル。

第五十三例。 越某男。廿二歳。大工。大正九年四月六日初診。

診 斷 多形滲出性紅斑。

顔面腹部背部等ニ膿疹ヲ作り自覺症ナシ孤立性ニ散在シ發熱三十七度七分アリ。

第五十四例。 米谷某男。八歳。小學生。大正三年三月廿三日初診。

診 斷 多形滲出性紅斑、傳染性軟屬腫。

今月十日頃感冒ニ罹リ十五日頃腓腸筋ニ疼痛ヲ訴ヘ十七日頃ヨリ下腿ニ掻痒性小發疹ヲ生シ上腿ニ蔓延シ現今前脚ニモ同様ノモノヲ見ル。

第五十五例。 中村某女。五十六歳。眞田組業。大正九年十一月六日初診。

診 斷

診 斷 多形滲出性紅斑、腋臭症。

前記ノ症例ニ就テ次ノ各項ニ就キ相互ノ關係ヲ調査セシニ得タル成績大約次表ノ如シ。

左右手背足背ニ赤色掻痒性發疹ヲ生シ發疹ノ色ハ赤色ヲ呈シ中心ハ特有ノ紫紅色ヲ呈セズ大サハ小指瓜甲大ニシテ皮膚面ヨリ隆起スルモ表面ハ扁平ナリ、兩側ノ指ノ背面ハ一般ニ腫脹シ發赤ヲ呈スルモ上方手甲ニ及ベバ以上ノ發疹散在シ劇甚ノ掻痒アリト、痒感ノタメ諸處ニ血痂ヲ見ル、四五年前右側肩胛關節ニ「ロイマチス」様疼痛アリテ發病十日前ニモ疼痛アリシト云フ。

昨年モ同様ノ發疹ヲ見タリト云フ。

第五十六例。 金子某男。廿六歳。紙商。大正九年十一月十九日初診。

診 斷 多形滲出性紅斑。

一昨日ヨリ突然四肢口唇ニ發疹ヲ生シ輕度ノ掻痒アリ同時ニ多少ノ惡寒及熱發感アリシトイフ、關節痛ナシ。

現 症 四肢ノ伸側ニ兩手甲、前膊伸側、肘關節伸側、膝關節ノ伸側面ニ多數ノ小豆大ヨリ小指頭大ノ鮮紅色ノ發疹ヲ生シ大ナルモノハ中央紫紅色ヲ呈シ或物ハ中央ニ大小ノ水泡ヲ有シ又膿疱ヲ有スルモノアリ又小ナルモノハ赤色丘疹トシテ存在ス、又手掌ニハ米粒大ヨリ大豆大ノ赤色斑ヲ皮下ニ透見シ又水泡アリ足趾ニハ粟粒大ヨリ小豆大ノ赤色斑ヲ多數ニ皮下ニ透見ス。

既往症 三年前下腿ニ筋痛ヲ覺エタルコトアリ。

九歳頃ヨリ秋ヨリ冬ニ互リ及三月若草萌ユル頃年々同様ノ發疹ヲ來セリト而シテ一二週間ニテ全治スルモ今度ノ發疹最甚シトイフ、發生前ニ飲酒、鱒ヲ食セリト、又常ニ便秘スト云フ、家族的關係ハ他ニ同様ノ疾患ヲ見ズ又「ロイマチス」ニ罹リシコトナシ。



## 總括

以上ノ事實ヲ概括スレバ次ノ如シ。

一、本症ハ金澤病院皮膚科外來患者一萬七千八百八十四名中五十六例ニシテ〇・三二%ニ當ル。

一、年齢トノ關係ハ十六歳ヨリ廿歳迄ニ最多ニシテ二一%アリ、次デ廿一歳ヨリ廿五歳迄ノ間ニシテ一八%ヲ占ム、要スルニ青年期ニ多ク、諸家ノ說ニ一致ス。

一、性ハ男子ニ多シ。

一、季節トノ關係ハ五月最多ニシテ一八%、次デ三月ノ一四%、次デ六及ビ七月ノ一二・五%ナリ、然ルニ春秋ニ多シト云フ諸家ノ說ニ反シ當地方ニ於テハ春夏ニ多ク秋冬ニ少シト云ハザルベカラズ。

一、部位ニ就テハ殆ド相對性ニ來リ、手甲、足背、前膊及ビ下腿ノ伸展側ニ來ルコト最多ク、次デハ顔面ナリ。然レドモ屈側面ヲ犯スコトアリ。又頸部、頭部、背部ニ生ズルモノ各四例、全身ニ發セルモノ三例アリ。コハツーム  
フッシュ氏ノ說ニ反スレドモ、舌、口唇ニ發セル二例ハ共ニ再發型ニシテ氏ノ說ニ一致スベシ。

一、職業的關係ハ農業者最モ多ク、次デ學生ナリ。

一、自覺症ハ有セザルモノ最モ多ク、次デロイマチス様關節痛アルモノ十五例即チ二六%ニシテ、次デ筋痛、熱發、頭痛アルモノ各、四例ニシテ七・一%ニ當ル。

一、經過ハ多ク急性惡急性ナルモ唯一例ニ於テ四年ニ及ベル慢性症アリ。

一、再發トノ關係ハ割合ニ多ク十三例即チ二三%アリ。

一、住所トノ關係ハ意味少ナキモ都市ノ者ニ多ク半數以上ヲ占ム。衛生的觀念、土地ノ不便等ノ關係ヨリ醫師ヲ訪フモノ少ナキニヨルナラムカ。

以上ノ成績ヲ東京大學皮膚科教室及ビ九州大學皮膚科教室ノ統計ニ比較スレバ次ノ如シ。

東京大學皮膚科新來患者數ハ明治卅二年ヨリ同卅九年ニ至ル八年間ニ於テ二萬二千五百四十四人ニシテ其内本症患者ハ八十三名ニシテ〇・三七%ニ當ル。

又、明治卅九年ヨリ大正四年ニ至ル十年ノ九州醫科大學皮膚科教室ノ新來患者數ハ三萬九百五十一名ニシテ本症ハ七〇名即チ〇・二三%ニ當ル、然シテ是等ニ就キ年齡及ビ性トノ關係ヲ比スレバ次ノ如シ。

性トノ關係 (M.ハ男 W.ハ女 M>W.ハ男ハ女ヨリ多シノ意)

	全患者數	本症患者數	本症患者ノ百分比	性トノ關係
東京大學皮膚科	22544	83 { M. 41 W. 42 }	0.37%	M<W.
九州大學皮膚科	30951	70 { M. 40 W. 30 }	0.23%	M>W.
金澤病院皮膚科	17184	56 { M. 31 W. 24 }	0.32%	M>W.

次ニ年齡トノ關係ハ余ノ成績ニテハ十六歲ヨリ廿歲ノ間ニ於テ最モ多ク、十二例、廿一歲ヨリ廿五歲ニ於テ第二位ニシテ、十例、十一歲ヨリ十六歲ノ間ハ第三位六例ナリ。然ルニ東京大學皮膚科統計ニヨレバ廿一歲ヨリ廿五歲

ノ間ニ於テ最モ多ク廿五例、十六歲ヨリ廿歲マデガ第二位ノ十九例、廿六歲ヨリ卅歲マデガ第三位ノ十一例ナリ。又九州大學皮膚科ノ統計ニテハ廿六歲ヨリ卅歲マデガ第一位ニシテ十五例、廿一歲ヨリ廿五歲マデガ第二位ニシテ十二例、十六歲ヨリ廿歲マデガ第三位ニシテ十一例ナリ。

要之スルニ以上三統計トモ青年期(十六歲ヨリ卅歲マデ)ニ多シト云フ。諸家ノ所論ニ一致スベク其各青年期ニ於ケル數ハ下表ノ如シ。

最後ニ多形滲出性紅斑ガ爾他紅斑ニ對シ如何ナル割合ニ來ルカラ觀察セムト欲シ、余ハ森田、田中、小出

年 齡	東大皮膚科		九大皮膚科		金澤病院皮膚科	
	患者數	百分比	患者數	百分比	患者數	百分比
16 <sub>j</sub> - 20 <sub>j</sub>	19	22.9%	11	15.7%	12	21.4%
21 <sub>j</sub> - 25 <sub>j</sub>	25	29.7%	12	17.1%	10	17.8%
26 <sub>j</sub> - 30 <sub>j</sub>	11	13.2%	15	24.4%	5	8.9%

(214)

三氏ノ大正二年ヨリ同六年ニ至ル金澤病院皮膚科外來患者統計ヲ以テ檢シ、之ヲ東京大學皮膚科、九州大學皮膚科ノ夫レニ比較セリ。然シテ金澤病院皮膚科ノ總紅斑數トハ本症及ビ結節性紅斑、環狀紅斑、單純性紅斑、日光紅斑、中毒性紅斑ヲ含メリ。又東大ノ總紅斑數トハ本症及ビ結節性、單純性、中毒性、爾他紅斑等ヲ含ミ、九大ノ總紅斑數トハ本症及ビ地圖狀、寒熱的、丘疹性、結節性、揮發性、尋常性、月經性紅斑等ヲ含メリ。然シテ東大、九大ノ統計ハ前述ノ統計ヲ以テ行ヘリ。

	外來患者數	總紅斑數	多形滲出性紅斑數	本症ノ紅斑數ニ對スル百分比
東大皮膚科	22544	132 { M. 58 W. 72 }	83 { M. 41 W. 42 }	62.9%弱
九大皮膚科	30951	124 { M. 70 W. 54 }	70 { M. 40 W. 30 }	56.4%弱
金澤病院皮膚科	9575	58 { M. 30 W. 28 }	27 { M. 16 W. 11 }	46.5%強

ノ贊助ノ勞ヲ深謝ス。

引用書目

- 1) Wolff, Die Erythema und die mit diesen verwandten Krankheiten, Purpura, Urticaria etc. Macek's Handbuch der Hautkrankheiten.
- 2) Heller, Über Erythema exsudativum multiforme nach chemischer Reizung der Harnröhre. Deutsche med. Wochenschr. 1901. Nr. 11. Ref. 皮膚科泌尿科雜誌, 第三卷。
- 3) Joseph, Lehrbuch der Hautkrankheiten. 1914。
- 4) Jarisch, Hautkrankheiten. 1908。
- 5) Riecke, Lehrbuch der Haut- und Geschlechtskrankheiten. 1914。
- 6) 栗田章司, 東大皮膚科外來患者統計, 皮膚科泌尿器科雜誌, 第三卷。
- 7) 西川生太郎, 同上, 第十卷。
- 8) 淺田恒三, 大森守, 吉村榮太郎, 栗崎道隆, 九州大學皮膚科外來患者統計, 我教室ノ新築ト七年。
- 9) 關川敬治, 原信彦, 荒木熊雄, 納富保廣, 占部次七, 同上, 開講十週年誌。
- 10) 中野等, 多形滲出性紅斑ノ一例, 皮膚科泌尿器科雜誌, 第九卷第七號。
- 11) 土田章司, 極メテ慢性ニ經過セル多形滲出性紅斑兼「アクロメガリー」ノ一例, 同上, 第十三卷第十號。
- 12) 櫻根孝之進, 多形滲出性紅斑兼「ロイマチス」性紫紅, 同上, 第十五卷第二號。
- 13) 土肥慶藏, 皮膚科學, 上卷。
- 14) 山田旭, 兩氏, 皮膚病診斷及治療法。
- 15) 森田肇三, 田中清次, 小出隆次, 金澤病院皮膚科新來患者統計, 十全會雜誌, 第二十三卷第十號。

之ニヨリテ見レバ、本症ハ爾他紅斑ノ半數或ハヨリ以上ヲ占ムルコトヲ知り得ン。

終リニ臨ミ恩師土肥教授ノ懇篤ナル御指導ヲ衷心ヨリ感謝シ、同僚田中英香氏